

ゆうあい報 おたがびたる



特定医療法人
祐愛会織田病院 ODA REGIONAL MEDICAL CENTER

発行者 祐愛会織田病院企画室
責任者 織田 正道 <院内報>

理想の 地域包括ケアシステムの 構築をめざして

「ゆうあいビレッジ」が完成

特定医療法人祐愛会理事長

織田 正道

超高齢社会が現実のものとなり、さらに進展している現在、地域の皆さんが住み慣れた場所で、その人らしく老い、安心して生活を続けていけるためには、医療の充実と共に、可能な限り自立した生活が営めるように、保健、医療、介護、さらには生活支援、住宅などの枠組みを超えた総合的で一体的なサービス提供が重要です。私どもは、豊かな長寿社会のモデル作りをめざし「ゆうあいビレッジ」の構想を立ち上げ、これまで具現化に努めてきました。そしてその方向性は「地域包括ケア」の考え方に沿ったものと言えます。

(一) 総面積八〇〇〇坪の

「ゆうあいビレッジ」が完成

平成九年に、病院から在宅に向けての復帰支援機能を持つ介護老人保健施設「ケアコートゆうあい」が開設しました。その後、当法人は一四年もの歳月をかけ、総面積八〇〇〇坪の敷地内に、二十四時間体制でのサポート機能を持つ総合ケアセンターはじめ、施設系サービス(介護老人保健施設、ショートステイ)、居住系(グループホーム、特定施設)、通所系(デイケア、一般デイサービス、認知症デイサービス、介護予防フィットネス、小規模多機能ホーム)、訪問系(居宅介護支援事業所、訪問看護ステーション、ヘルパーステーション)など、あらゆる機能を集合した「ゆうあいビレッジ」を建設してきました(写真)。そして、

さる七月三日に多くの市民の皆さんに祝っていたいただき晴れて完成式を行いました。「ゆうあいビレッジ」は病院から車で五分、バス沿いであるため住宅街や周辺地区からのアクセスもよく、地域包括ケアの拠点にもなっている場所です。

(二) 「ゆうあいビレッジ」のコンセプト

この「ゆうあいビレッジ」のコンセプトは、公園の中に施設や住宅群があり、四季を感じさせる生活環境の中に、お年寄りが豊かな「クオリティ・オブ・ライフ」を樂しめ、やすらぎを持てるような空間をイメージしています。また、施設群は文化を感じさせる北歐風のデザインでテラス・庭などが美しく調和し、散歩道を歩けば庭園の樹木や草花に四季の豊かさを感じさせ、人々の息づかいが感じられる安心感のある環境を構成しています。この様な生活環境がお年寄りにも、ゆとりの感性、感情をよみがえらせてくれるものと思います。さらに、すべての施設や住宅はユニバーサルデザインを採用し、利用される方々の使い勝手に配慮した仕上がりになっています。

また、「ゆうあいビレッジ」の敷地以外にも、山浦、谷所、さくら通りの各地区に同様のデザインを採用したデイサービスを開設し、利用者の状態に合わせたサービスを選ぶことが可能となっています。

(三) 地域包括的ケア実践のための

人材育成

「ゆうあいビレッジ」が完成し、保健、医療、介護分野を包括的にサービス可能とするすべての体制がほぼ整いました。しかし、これ等の分野が有機的に結びつき、継続的で一貫性のあるサービスとして提供可能となるのは、お互いの役割を理解し尊重

した分野・職種を超えたチームアプローチが重要であることは言うまでもありません。殊に医療と介護は異なる制度の中でサービス提供を行ってききましたので、アセメントひとつ取っても視点の相違があり、情報の一元化・共有化すら難しい面があります。今後、分野間の壁を如何に取り除くかが大きなテーマであり、医療と介護を複合的に担う役割ができる人材の育成が急務です。特に医療スタッフの介護分野への理解が急がれます。今後、異なる分野を計画的にローテーションし、現場でのOJTを通じ、人材を育成していきたいと思

ます。
今後私どもの法人は、長寿社会における「地域包括ケアシステム」のモデルとして全国に発信できるよう、皆さんと共に新たな夢と希望を持って、前進していきたいと思



地域包括ケアシステム

ゆうあいビレッジの

完成と今後について

ケアコートゆうあい施設長
千々岩 親幸

来るべき超高齢化社会に向けて厚生労働省は研究会を作り、そこで地域包括ケアというシステムを打ち出しました。その報告では七五歳以上の人口が現在の二倍に増大する二〇二五年までにこのシステムが実現されていることを提案しています。

地域包括ケアシステムにおける介護サービス提供体制では「地域住民は住居の種別(従来の施設、老人ホーム、高齢者住宅、自宅)にかかわらず、おおよね三〇分以内(日常生活圏域)に生活上の安全・安心・健康を確保するための

多様なサービスを二四時間三六五日通じて利用しながら、病院等に依存せずに住み慣れた地域での生活を継続することが可能になっている。」とあります。このようなサービス体制を構築するために高齢者ケアの原則として、住み慣れた地域や住居での生活の継続、本人の選択、自己能力の活用の三点を提言しました。そ

してサービス提供に当っては、「在宅サービス」が優先であって施設サービスは

補完的なものであり、多数の職員を抱えるような従来型の施設とは異なり、軽装備の多様な住宅を前提として、地域の医療や介護などの様々なサービスを利用者の状態にあわせて組み合わせることにより、二四時間三六五日体制のケアシステムを地域単位で実現するとしています。

このため今後は八〇人〜一〇〇人が入所するような大規模な施設は作られず多くとも二〇人程度の高齢者が利用するような施設や住居が作られることとなります。例えば都市部では空き家など既存資源活用による小規模な拠点の整備を進め、人口減少地域では既存施設の転用や政策的集住を誘導するなど地域の実情に応じた整備を行うこととなります。

ここで言う「在宅」とは現役時代から住んでいる自宅に限定されるものでな

く、介護が必要になっても住み続けることができる集合住宅などに住み替えることも含んだ広義の概念であり、「住み慣れた地域」についても、現役世代に住んでいた地域や住居に固執した概念ではなく、本人が住み続けたいと考える地域を本人が選択するという広い意味なのです。

震災の影響で改革のスピードはやや遅くなった感がありますが、方向性は変わることはないと思われま

るケアコートゆうあいのような老人保健施設は以前よりもさらにリハビリを重点的に行う施設へと変わり、自宅介護が困難になられた方は地域包括ケアシステムにおける「在宅」へと住み替えが促進されるようになります。

私もこのような考え方に基

いて各地域にデイサービス施設、ビレッジ内に小規模多機能施設、今月オープンの特設施設「レジデンスゆうあい三丁目」を建設いたしました。ゆうあいビレッジ構想では今後も前述したようなシステムの構築をいつそう充実させていく予定となっております。

ゆうあいビレッジ 案内板



レジデンスゆうあい3丁目

64型MDCTの導入について

放射線科主任 坂田 善和

当院では、八月より従来の4列マルチスライスCTに代わり、64列マルチスライスCTが稼動することになりました。64列マルチスライスCTとは、数多くあるCT機種の中でも上級機に当たり、大学病院、地域の基幹病院、循環器を専門とする医療機関等にしか設置されておらず、その設置状況は全国でもまだ三割程度です。佐賀県内においても、まだ施設にしか設置されてなく、その期待は非常に大きなもの



64列マルチスライスCT

となつていきます。
では、この64列マルチスライスCTは今までのCTとどこが違うのでしょうか？
大きな特徴は、①大幅な撮影時間の短縮ができる、②非常に細かい間隔(0.625mm

mスライス)での撮影ができる、③一度に広範囲の撮影ができる、です。この64という数字は検出器の数を表しています。検出器とは患者の体を透過してきたX線を電気信号に変えて画像化する装置ですが、この検出器の数が多いほど一回転あたりの画像にできる範囲が広くなります。その結果、撮影時間も短くなります。例えば、腹部の撮影では従来三十秒ほどの息止めが必要でしたが、十秒前後で行えるようになります。撮影時間が短くなれば、患者様の負担も大幅に軽減でき、さらに検査時間も短くなりスループット(単位時間あたりの処理能力)が向上します。また、検出器の幅をさらに細かくすることでより詳細な画像を得ることができます。そのほかハードの面でも患者様に非常に優しい設計となっております。

また、これらの特徴を最大限に生かした今までは実現できなかった新しい撮影ができるようになります。それが冠動脈CTです。従来CT検査は画像を作る上で、動きに弱かったのですが、X線管をより高速で回転させることで、動きのある心臓(冠動脈)を撮影することが可能となりました。従来、狭心症や心筋梗塞の原因となる冠動脈を診るためには心臓カテーテル検査が必要でした。もちろん今でも心臓カテーテル検査は狭心症の診断において最も確実な方法ですが、心臓カテーテル検査は通常は入院が必要です。それに比べ64列マルチスライスCT検査は外来での検査が可能で、かつ侵襲が少ないため、狭心症診断に大きな期待が寄せられています。
最後に、まだスタートしたばかりのこの64列CTですが、従来の装置よりはるかに進歩した性能を、十分診療に活かせるようにしていくことがこれからの課題であります。院内に限らず、地域の先生方にも積極的に活用していただけるよう広報をしっかり行って行きたいと思っております。

ハワイ大学医学部二年生 当院で臨床実習

皮膚科部長 織田 洋子
SE 宇佐美 大
医局秘書 田中 優子

佐賀大学医学部とハワイ大学医学部の国際交流事業(JABSON-Saga exchange program 2011)が今年も六月二十日〜七月一日まで、佐賀大学医学部を中心に行われました。
当院にも四名の学生が六月三十日に来院され院内とゆうあいビルレジで臨床実習を行いました。

二〇〇一年よりこのプログラムに参加し十一年目を向かえました。今回医局秘書の田中さん、SEの宇佐美さんを中心に当法人の歴史、組織図、プロモーションビデオの英語版を作成し、よりスムーズに実習をすすめることができました。

下記の写真は実習終了後浴衣に着替えて祐徳稲荷神社に参拝に出かける光景です。

日本三大稲荷である祐徳稲荷神社では、歴史や日本伝統を学ぶことができました。また織田家に伝わる古医書資料室を見学したり、築三〇〇年の茶室では、お茶を自らたてるなど日本文化の一端を経験していただきました。

地域の文化的背景を経験することは地域医療を理解する上で重要なことです。この交流をさらに充実し、ハワイ学生にとって貴重で有意義な時間になるように努めて参りたいと思えます。



ハワイ大学医学部学生(左からの4人)と祐徳稲荷神社参拝へ

